

# 資料館だより

発行

高松宮記念ハンセン病資料館  
〒189-0002 東京都東村山市青葉町4-1-13  
電話 042-396-2909  
FAX 042-396-2981  
郵便振込 東京00130-7-764159  
高松宮記念ハンセン病資料館運営協力会

## らい病予防法廃止記念

# ハンセン病回復者の国際交流会議

## 人間の尊厳と共生を目指して



満員の砂防会館国際交流会議

### 砂防会館に七百人 「東京宣言」採択

「らい予防法廃止記念・ハンセン病回復者の国際交流会議」が、全国ハンセン病療養所入所者協議会、アイデア、藤楓協会主催、厚生省笹川記念保健協力財団後援で、六月二十日(土)午後一時より五時まで千代田区平河町の砂防会館で七百人近くが参加して開催された。

「人間の尊厳回復と自立共生を目指す」IDEAの代表たちが、世界のハンセン病対策の現状と将来への期待を協議し「東京宣言」を採択するとともに、患者・回復者の国際交流の促進をはかるために、アメリカ、インド、中国、韓国、フィリピン、エチオピア、ブラジルなどから結集した。

主催者である全療協・高瀬会長、アイデア・コパール会長の挨拶、藤楓協会総裁・寛仁殿下のお言葉と小泉厚生大臣、WHOの中山宏事務局長の来賓挨拶、つづいて福沢美和さんが「盲導犬とともに」をテーマに感動的な講演を行った。

テーブル討論では日本を含む八カ国の代表が熱っぽく自国のハンセン病対策の現状報告や提言を行った。その後、全療協の神事務局長が「東京宣言」案を朗読、満場一致で採択された。多磨栗生、駿河からもバスで療友職員多数が参加して会場を盛上げた。

一九九八年六月二十日、東京において、日本のライボ予防法廃止記念事業として開催された「ハンセン病回復者の国際交流会議」において、ハンセン病患者・回復者及び一般市民は、「人間の尊厳回復と共生をめざして」という主題のもとに意見交換と交流をおこなった。

今日ハンセン病は、有効な治療法の確立により、一般の疾病同様・治癒する病気となった。しかしながら、日本をはじめ世界の各国では、いまだにいわれのない偏見や社会的差別が根強く存在し、人権と尊厳が著しく阻害されているとのハンセン病患者・回復者の証言はなによりも重く受けとめられなければならない。

ハンセン病患者・回復者の辛酸を窮めた永年の闘病生活や社会から排除され、人間としての生存権をも否定された暗い歴史は、再びくり返されてはならない。

現在進められているハンセン病の啓発。患者回復者の

の経済的自立の促進。差別の撤廃及び社会における共存をめざす活動は、極めて重要であるにも拘わらずまだ緒についたばかりであることを共通の認識とする必要がある。

今から五〇年前の一九四八年十二月一〇日、国際連合第三回総会で採決された世界人権宣言は、「すべての人間は生まれながらにして自由であり、尊厳と権利について平等である。」(第一条、「権利と自由の享有に関して、

## 東京宣言

一 今回の会議のようなハンセン病患者・回復者と一般市民の交流会の機会を拡大し相互の理解の促進を図ること。

二 ハンセン病患者・回復者が自ら一般市民としての権利及び責任を自覚し、積極的に社会と関わっていくと同時に、地域社会もかかる努力を受け入れること。

いかなる差別もされない権利を有する」(第二条)と宣言した。

我々国際交流会議参加者一同は、世界人権宣言の理念を想起し、ハンセン病患者・回復者を含む全ての人が平等に権利と機会を享受することをめざして、次に掲げる課題に自ら取り組んでいく決意である。

### 三 偏見及び、あらゆる

社会的差別を解消するために、さまざまな困難に直面しながらも、自らの道を切り拓いてきた勇氣ある先達の努力と志を引き継ぎ、発展させるために、病気の体験者自身が重要な役割を担って努力をすること。

四 ハンセン病だけでなく、難病を患う人々やさまざまな障害者と連帯し、平等な社会参加の機会の拡大のために、重要な役割を担って

### いくこと。

五 各国の政府や非政府団体に対し、ハンセン病患者・回復者の尊厳の尊重と共生への努力を求めると同時に、回復者の尊厳を傷つけるような表現を改めるよう求めていくこと。

六 世界の人々に、ハンセン病問題に対する理解を促すために、各国のハンセン病の歴史と回復者の体験に学ぶとともに、一層交流を深めること。



テーブル討論

七 ハンセン病についても、治療を要する人々がいなくなり、手当を必要とする障害も、克服すべき差別もなくなり、かつてこの病気を体験した人たちが市民として平等の権利と生活空間と義務を享受し、社会に共生できるようにってはじめて、最終的に病気の終息と勝利の宣言をすることができると認識し努力を続けること。

以上、国際交流会議の名において宣言する。

一九九八年八月二十日「ハンセン病回復者の国際交流会議」参加者一同

## 趙昌源絵画展

資料館では開館五周年記念行事の前段として、九月一日より三十日まで研修展示室において、小鹿島更正園元園長・趙昌源先生の絵画(八点)、他の展示を行う。戦後の混乱期、偏見差別から起きた「飛竜里島の大惨事」を題材にした異色の絵画展である。

# IDEA・全生園で交流会 四団体と理解の話し合い

六月二十一日(日)午前十一時すぎ、アイデアの代表外十二名の一行は、厚生省、藤楓協会、笹川記念保健協力財団、全療協、全生園職員、自治会、資料館関係者、通訳のボランテニアなど、



IDEA代表との懇親会

関係者多数の迎えを受け資料館を訪れた。資料館ではこの日のためにボランテニアの方たちが

つくづくくられた展示品の英訳説明書を手渡し、平沢運営委員の案内で会場を見学して回った。その後一行は納骨堂へ参拝し、開園以来の物故者三千八百二十五名の霊に献花を捧げた。十二時三十分から一四時まではコミュニケーションセンター

まではコミュニケーションセンター

ーにおいて、交流懇親会を行なった。この懇親会には地元の細淵一男市長、細淵静雄社会福祉協議会長、関口昭八身患連代表、河邑晶子三多摩肢障協代表、福岡寿美子あゆみの会代表なども参加しアイデアの方たちとの交流を深めた。つづいて一四時から一五時三十分までは、次の四班に分かれてそれぞれ交流を行なった。

◎盲人会▼エチオピア(アレガ・ゼレレク、フィリップス(エルネスト・カバース)

◎草創会・愛友会▼インド(P・Kコパール)、中国(楊理合IIヤン・リーホウ) ◎宗団▼アメリカ(バーナド・プニカイヤ、アンウェイ・ロー)、ブラジル(ファステイノ・ピント) ◎互助会▼韓国(鄭相權IIチヤン・サンゴン、同夫人、ウバク、チャン)各班にはそれぞれ通訳や参加者も分散して出席し話し合いを盛り上げた。なお一行は二十三、二十四日、三班に分かれ、松丘大島、宮古を訪問し、二十五日帰国された。

## 「アイデア展」

国際交流会議の際、砂防

第二十一回ハンセン病医学夏期大学講座(松尾英一実行委員長は、次の要領で実施されることになった。 ◎期日・平成10年8月24日(月)〜8月28日(金) ◎対象・医学部、歯学部、看護学生、医師、歯科医師、看護婦、医療福祉、医療技術の学生、検査技師、その他医療関係者など ◎定員・四十名程度

## ハンセン病医学 夏期大学講座

◎場所・多磨全生園研修棟ハンセン病研究センター ◎受講料・無料 ◎経費・食費・旅費。宿泊

◎申し込み先・〒189-0000 東京都東村山市青葉町4-2-1 国立感染症研究所ハンセン病研究センター・夏期大学講座実行委員会 電話・042-391-8211 FAX・042-394-9092

この写真は元朝日新聞のカメラマン・八重樫信之氏が撮影したもので、対象は世界各国のハンセン病患者や回復者たちである。

(低額)自己負担 ◎申し込み期限・平成10年7月24日

カ所の療養所でも開催する予定である。



納骨堂参拝の代表たち

### 栗生楽泉園・星塚敬愛園 思い出の写真展

五月二日より六月三十日まで資料館研修展示室で開催された「栗生楽泉園・星塚敬愛園思い出の写真展」は好評のうちに終了した。

栗生は湯之沢部楽、保育所、運動会、食事運搬など四十点、星塚は昭和十年、奄美(大島郡)より二人沖繩より一二九人収容時や、引揚げの時の写真など四十点、それぞれ関係者には思い出の深い写真が展示されていた。

五月二十四日にはカラオケ交歓会に来園した星塚療友八名、六月四日には栗生から入園者職員十八名がバスで来訪し、それぞれ写真展を見学、なつかしい写真に声をはずませて語り合っていた。なお来年は「沖繩愛楽園・宮古南靜園思い出の写真展」を予定している。



### 資料館五周年 記念展

六月二十五日は資料館開館五周年にあたるが、今年には国際交流会議等があったため、記念行事は秋に次の要領で開催することになった。

「趙根在(故村井金二)写真展」昭和三、四十年代、各療養所を周り、病気を克服していく人々の姿を撮りつづけた貴重な写真百点

昭和二十七年、六十六歳

で衆議院議員に七回目の当選。同二十一年、鹿屋市長となり、同二十九年任期を終え、鹿屋市名誉市民となり、昭和四十六年五月十一日八六歳で没す。

その間、藤楓協会より貞明皇后ご遺金感謝状、厚生大臣より救ライ感謝状、保健文化賞などを受ける。



### 定着村より来館

四月十六日、韓国全羅北道の定着村、益山農場から沈田漬(シムチェンワン)さんが、介助の金賢洙農場長とともに来訪された。

沈さんは戦前日本の教育を受け、日本語も達者「小鹿島半世紀」などの著書もあり「益山農場の沿革」「定着村一覽表」などの寄贈を受ける。

「資料館はぜひ見たかった」とのこと、大変感動しておられた。全生園では二泊され、互助会(韓国人入園者の会)、聖公会の方と歓迎、神山復生病院、神山教会なども訪問し、帰国された。

◎あとがき

ハンセン病資料館は早くも開館五周年を迎えた。記念行事、運営等頭の痛い問題が山積、高齢化の中、生残りを必至に模索!(修)

### 先駆者たち⑬

## 永田良吉

一八八六〜一九七一

永田良吉は一八八六(明治十九)年九月十四日、鹿児島県鹿屋に生まれ、明治四十二年大始良村吾平小学校の代用教員となり、一九一三(大正二)年、二十七歳で大始良村議会議員に当選。大正四年同村村長となる。

大正八年、鹿児島県議会議員に当選。昭和三年衆議院議員に初当選。らい予防法を審議する委員となる。

この時、全国で鹿児島県が日本一ハンセン病患者の

多いことを知り、らい問題に深い関心を持ち、「政治は愛なり」を説く。

一九三二(昭和六)年、らい予防法案について意見を

星塚敬愛園が開設される。

自らの出身地にライ療養所を設置することについては地元から猛反対があり、数々の迫害を受けたが、く

陳述、昭和七、八の兩年国会に「鹿児島県にライ療養所設置に関する建議案」を提出する。

昭和十年十月二十八日、

代鹿屋市長となる。

り返し、くり返し、誠心誠意説得を続け、開設にこぎつけたものである。昭和十八年には代議士の俤、第二